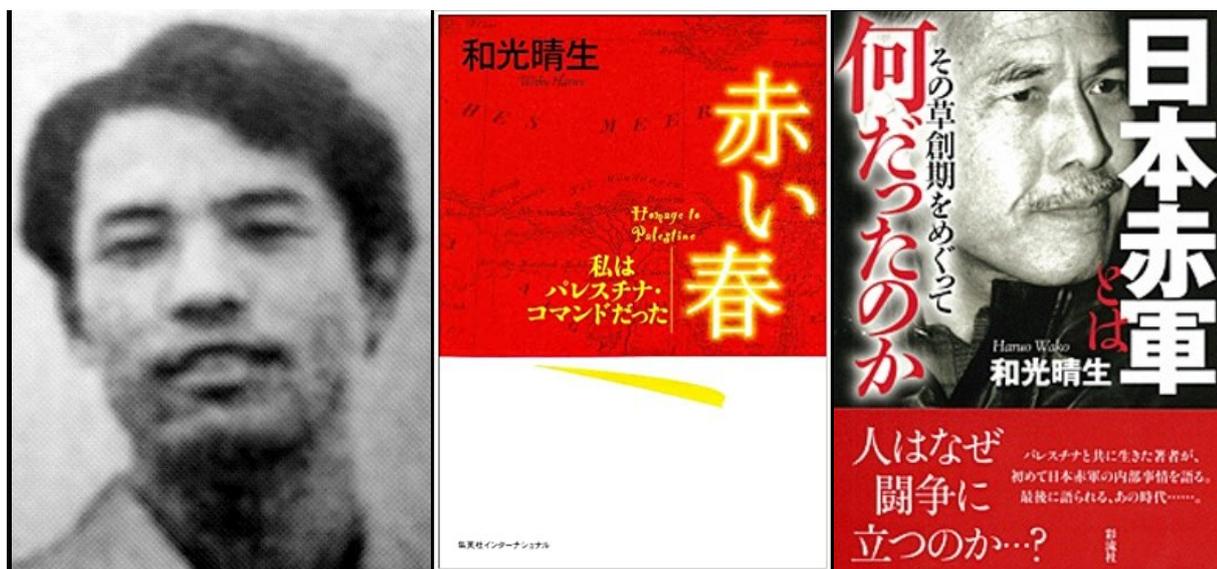


1972年5.30 リッダ(テルアビブ)空港銃撃決死作戦総括の深化に向けて

2021年11月記 和光晴生

〒779-3133 徳島市入田町大久 200-1 徳島刑務所

1968年慶應義塾大学入学 71年映画「赤軍-PFLP・世界戦争宣言」『赤バス隊』参加
73年日本赤軍加入 74年シンガポール闘争・ハーグ闘争 75年クワラルンプール闘争
78年日本赤軍脱退 78年PFLP正規軍参加 97年逮捕(レバノン) 09年無期懲役確定
07年『赤い春 私はパレスチナ・コマンドだった』(集英社) 09年「日本赤軍とは何だったのか」(『情況』) 09年 10年『日本赤軍とは何だったのか その草創期をめぐって』(彩流社)



(注) 原文は獄中の制約から、人名はほぼイニシャル化されています。公開にあたって基本実名に変更しています。

ここ数年、「10.8 羽田闘争」や「全共闘運動」の50周年ということで、記念行事やイベント、プロジェクト等が数多く催され、関連の出版活動も盛んでした。

2022年には「リッダ闘争」が50周年を迎えます。この作戦をめぐっては既に多くの方々が回顧文や再検証を求める疑義を含む論考を提起されているようです。

獄中の私が入手できたものは極めて限られています。

「日本赤軍」の「司令官同志」であった重信房子さん(当初の検閲では実名は抹消対象となるので、イニシャル表記にします。他の方々についても同様)向けのパンフ「オリーブの樹」や『情況』誌と鹿砦社刊行の『一九七〇年端境期の時代』『抵抗と絶望の狭間』、風塵社刊『水平線の向こうに一檜森孝雄遺稿集』など、きわめて限られているのですが、あえて私からの「リッダ 50周年」に向けた見解を提起しておきます。

重信房子さんは、1971年当時の共産同赤軍派の指導部のメンバーが、ほぼ全員逮捕されてしまった後に、リーダーとなった森恒夫さんとは対立することが多かったようです。

それで、重信さんは自身の新たな活動として、PFLP(パレスチナ解放人民戦線)との共闘に向け、出国する方針を提起し、それを認められないなら、共産同赤軍派を離れてでも行くと主張しました。

これに対し、森指導部は、行く以上は赤軍派として行くように、と譲歩したのです。

京大の全共闘活動家であったバーシム(アラブでのコードネーム)の奥平剛士さん、重信さんとアラブの地へ同行することで合意していたことから、出国前に、一時的に東京の共産同赤軍派残党の一部隊に所属したりしています。

重信房子さんとバーシムは、レバノンのペイルートに到着後、日本の共産同赤軍派としてPFLPとコンタクトを取りました。

PFLP 側は、政治局員でもあるアブ・ハニが率いる国際ゲリラ作戦専門の部局(ダーイラ・アメリーエ・ハーリジーエ/域外作戦部局)を、共産同赤軍派から派遣員の受け入れ先にしました。当時PFLPの軍事部門は、レバノン南部前線でイスラエルと対峙していた部隊が主力であり、正規軍的な編成を組んで、日常的に軍事活動を展開していました。そこが受け入れ先とならなかったのは、赤軍派が「よど号ハイジャック」を実行した組織と言う事で、認知されていたことによるものと思われます。アブ・ハニ部局との討議はバーシムが担当し、すぐさまどんな作戦を共働するか、との具体的な折衝が開始された。

重信さんは、非軍事部門の活動家ということで、PFLP の広報部門(作家として、日本でも有名なガッサン・カナファーニがリーダーでした)に配属されました。

「日本赤軍」が、PFLPの正規軍部門の活動に参加するようになったのは、リッダ闘争から 6 年も後になってからの事です。

1978 年当時、私が日本赤軍に脱退届を提出し、それが受け入れられず、3 年間の権利停止処分を受けた後に、自分で志願してレバノン中部のナバティエ前線のPFLP部隊に加わったのが初めてのことでした。それまでは、日本赤軍はPFLPの正規軍部門かの実情については、まったく無知、無縁のままでした。バーシムたちは、レバノン南部に居たことはあったようですが、それはアブ・ハニ部局の非公然ベースであったはずで

アブ・ハニの部局は、1967 年にPFLPが結成された直後から、ドイツのルフトハンザ機ハイジャックで身代金 500 万ドルを南イエメンで受け取る作戦を成功させた他、イスラエルのエル・アル機のハイジャック等を何度も試みた上、1970 年にはパンナム、KLM等の旅客機3機を同時にハイジャックし、ヨルダンの旧空軍飛行場跡に着陸さえ、盛大に爆破する作戦を展開していました。この作戦が契機とばって、1970 年、米政府の後押しを受けたヨルダン王制軍がパレスチナ勢力に対し、「黒い9月」と呼ばれる大弾圧を開始したとの見方が、パレスチナ諸組織の一部にあり、アブ・ハニとしては、そのような非難に抗するためにも、「リッダ闘争」のような作戦を急ぎ決行したいという考えに立っていたようなのです。バーシムとの討議が開始されてから、1~2か月後には、イスラエルの軍民両用のテルアビブ・ロッド(アラブ名ではリッダ)空港への襲撃作戦が立案されていました。

バーシムは、その作戦要員を送りつけるよう共産同赤軍派に何度も要請しました。

ところが、当時森指導部は、日本共産党神奈川県委員会革命左派との共闘を山岳ベースでの協働、組織の合同(「連合赤軍」)へと進められていた時期にあり、アラブからの要請は無視されました。バーシムは、1971 年頃に、やむなく彼の京都での全共闘仲間たち(銀閣寺近くの下宿をアジトにして集まっていたグループ)を、PFLPの作戦への要員として招請することへと方針を転換し、人伝えの書信で、レバノンに来る前に、イスラエルに立ち寄り、テルアビブ空港の入国ラウンジから管制塔に至るルートの調査まで依頼したのです。

これに、すぐさま応えたのが、ユセフ(檜森孝雄)、サラーム(安田安之)、オリード(山田修)の3人でした。

3人は、「予定通り、事を進める」との返答を送り、歩測による空港内調査に向けた訓練を京都市内で重ねた上で、71年9月30日には、イスラエル経由でレバノンに向け、空路を出発した。この段階で「リッダ闘争」は、共産同赤軍派による闘いではなく、京都における全共闘運動の一部であった「銀閣寺グループ」による作戦へと変化していた、と言えます。

重信さんは「京大パルチ」と呼んでいますが、檜森さんは立命館大生であつともある、「京都パルチ」との名称を使っています。檜森さんは「京都パルチ」について『水平線の向うに』に、以下のように記していました。「パルチは赤軍派などの組織—政治とは異なり、大衆が武装し、大衆の革命を組織するという、アナーキーな離合集散だった」「パーシムは赤軍派のメンバーというよりは、京都パルチザンの仲間としてあつた。赤軍派の路線やスローガンを口にしたことは一度もなく、何をやるのか、それがいつも中心だった」「リッダ闘争は、京都のパルチザンのクロスとして現出した。リッダ闘争は、1970年前後の国際連帯行動の実際を示す一例だと思う」

檜森さんたちによるテルアビブ空港調査の試みは、到着ラウンジしか果せず、管制塔へのルートは全く把握できませんでした。

その結果、当初は管制塔占拠を目指す計画だったが、到着ラウンジでの銃撃開始という事にならざるを得なかったのです。当然ながら一般旅行客も犠牲者になってしまいます。このことについては、オリード(山田修)は日本人だけの会議の場で疑義を提起して居ました。しかし、パレスチナの人びとにとっては、イスラエルは侵略者であり、その占領下にあるパレスチナの地はすべて戦場であり、民間空港も攻撃対象になります。

PFLPは、リッダ闘争を“ディールヤシン村作戦”と名付けていました。

1948年の「イスラエル建国」に至る過程で、ユダヤ人の武装グループ(イルグーン)がパレスチナの村ディールヤシンを襲撃し、村民数百名を虐殺した上、そのニュースをパレスチナ人社会に流布し、人々に恐怖心を煽り立て、隣国のレバノンやヨルダン等への逃亡するように仕向けました。無差別殺伐による恐怖の流布により、政治目的の実現を図るという手法は、まさにテロリズムそのものです。

パレスチナ人やアラブの人々にとって、リッダ闘争は「目には目を、歯には歯を」「掟破りには、掟破りを」との報復戦ということになります。この闘争では、イスラエル軍がすぐさま応戦し、凄まじい銃撃戦の中で、死者は26人、重軽傷者は70人以上出ました。

一般旅行客の犠牲者の多くは、プエルトリコからの団体旅行客でした

ベツレヘムやエルサレム等のキリスト教ゆかりの聖地には、当時も今も世界中から旅行客が訪れています。私が東京拘置者に居た頃、同じ階の死刑確定者を支える活動をしていた方も、現地で購入したエルサレムの絵ハガキを私に送って下さったりしていました。日本人旅行客が巻き込まれる可能性すらあつたわけです。

このような一般旅行客まで巻き込む作戦を日本人が担ったことについては、最近になつても日本の活動家の方から疑問や批判の声が寄せられています。そのような意見は当然のことではありますが、ではそれらの方々はリッダ闘争の組織者であり、政治責任を負っていたPFLPに対して非難の声を向けられるかとなると、これもまた疑問が生じます。

アラブのペイルートで、リッダ闘争にむけスタンバイしていたパーシムたちは、オリードからの疑義に答えきれずにいたことが『水平線の向うに』で明らかにされています。

「殺したヤツの家族からみたら、仇やで。おもえ耐えられるか?」「目を開いてじっと見たるがな」「どこ見んねん?」「うーん、水平線の向うや」……

疑義を提起していたオリード(山田修)は、1972年1月24日、ペイルート岬での4人そろっての寒中水泳中、心臓マヒで水難死してしまいました。

地中海性気候のペイルートは、天気の良い日なら海で泳げるほどの陽気になります。ただし、水温は低いです。オリードの死をめぐっての事務上の諸手続きには在ペイルートの日本大使館員が助力してくれたそうです。遺体の国内への搬送には、ユセフ(檜森)が同行することになり、この時点で彼はリッダ闘争の実行メンバーから外れざる得なくなり、国内で代替りの要員のオルグとリッダ以後の活動を託されたのでした。

それに応えたのが、丸岡修さんと岡本公三さんでした。

丸岡さんは、京都で「浪人全共闘」中に京都パルチザンに関わるようになり、その後社会人となっていました。岡本さんは鹿児島大学全共闘の活動家で、京都大学吉田寮に出入りすることもあったようです。彼はアラブに行けば、「よど号ハイジャック闘争」のメンバーの一人であった実兄岡本武さんに会う機会を得られるのではとの希望を抱いていました。当時、PFLPはハイジャックされたよど号機を受け入れた国家とは政治的関係を有していたのです。二人とも、アラブに行く事がリッダ闘争の作戦要員となることであるとの説明は受けていません。リッダ空港襲撃の決死作戦計画について、国内で人に明らかにする事など出来るはずも無いのですが、丸岡さんと岡本さんにとっては気の毒な経緯でした。二人の出国は、リッダ闘争決行のほんの2~3カ月前のことでした。

オリード(山田)の死は、パーシム(奥平)、サラーム(安田)、ユセフ(檜森)にとっては、大きな衝撃でした。

連合赤軍による山岳ベースでの12人もの同志の粛清という凶報に加え、身近な仲間であるオリードの死がパーシムたちを更に一層決死作戦の方向に追い込むことになったようです。PFLPのアブ・ハニたちも、山田さんの死で日本人グループの存在が公になってしまった事から、作戦決行を急ぐことにしました。

丸岡修さんと岡本公三さんは、パーシム、サラームと軍事訓練を共にする中で、「リッダ闘争」決死作戦への参加を求められた。

丸岡さんは、一旦帰国し身辺整理を果たした上で1年後になら参加出来ると述べたそうです。岡本さんは、パーシムの自らの死を決意した上での呼びかけを断ることはとても出来なかったようです。私は、岡本さんとは彼が若松孝一監督の事務所を訪問して来た時に初めて会ったのですが、アラブでは殆ど接する事はありませんでした。彼が1984年、PFLP—GS(総司令部派/アハメド・ジブリール)の人質交換作戦で、12年ぶりにイスラエルの獄中から解放され、日本赤軍に合流した後、1997年2月にペイルートで一斉検挙されてから、私はルミエ中央刑務所で3年間、彼と一つの舎房で過しました。その折り、彼は一度だけ「丸岡は、リッダ闘争から逃げた奴なんだよ」と言ったことがありました。

私が、丸岡修さんと初めて顔を合わせたのは、1974年9月のオランダ・ハーグ仏大使館占拠闘争から帰還した後のことでした。

初対面で、強面風に接してくる割には目に暗さが感じられるところがありました。

丸岡さんは、リッダ闘争後にアラブに結集して来た私たちを「バーシムたちと比べたら、なんだこいつら」と言う目で見えていたそうです。私の方は、なぜリッダ闘争の作戦メンバーが、京都パルチザン系の丸岡さんでは無く、鹿児島大学の全共闘活動家だった岡本さんになったのか判らないままでした。丸岡さんは、1985年頃になって、ベイルートのアジトに居た数人のメンバーとの雑談の折り、バーシムからの作戦参加要請を結果的には断っていた旨、明らかにしたそうです。私は、そのことをその場に居たという人から東京拘置所に居た時期に初めて知らされたのです。

空港の到着ラウンジへの銃撃作戦について疑義を提起していたオリード(山田)が水難死してしまったことから—

作戦の是非を問合うよりも、決行を急ぐ方向へと拍車がかかったわけです。それでもバーシムたちは、山田さんの意見をも十分に考慮に入れていたことがうかがえます。

まず第一に、「リッダ闘争」への日本人グループの関わり方は、無名の義勇兵としてPFLPの作戦を担うとしたこと。そうすることで、リッダ闘争はパレスチナ解放闘争主体による闘いとなります。バーシムたちは作戦後に声明を出すようなことはまったく考えていなかったようです。サラハは、決行前の打ち合わせ時に自決は手榴弾で行うことを主張しました。銃の場合、弾丸を撃ち尽くしてしまっていることが予測しうるからです。彼は、作戦決行時、銃弾を打ち終えた後、近くのトイレに駆け込み、手榴弾を両手に持ち顔の前で爆発させることで、身元を消そうとしたのです。

第二に、バーシムたちはリッダ闘争を自分たちにとっては「一回性の作戦」として位置付けていたものと見なせます。この作戦をもって自分たちのアラブでの活動には区切りをつけ、後は国内での闘いに力を注ぐべく方針化したことが、決死作戦実行メンバーは、当然ながら3人とも戦死すること、檜森さんを帰国させ、後を託したこと、更に丸岡さんも作戦直後に帰国することになっていたこと等からうかがえるのです。

作戦後、レバノンに居残るのは、重信房子さんと他に、レバノン南部の難民キャンプで医療ボランティアとして活動していた共産同赤軍派や京都パルチザンとは関係のない2人の女性との3人だけとなります。

この3人が、作戦後どのような身の振り方をするのかはバーシムたちの関与することではなく、3人それぞれの決めることでした、

ところが、バーシムたちの上記の意向と方針は、以下の事情で崩れてしまいます。

まず、作戦メンバーであった岡本さんが銃弾を撃ち尽くした後、手榴弾のピンを抜かずに握ったまま、空港ビルから滑走路へと走り出したところで、空港警備兵に後ろから羽交い絞めにされ拘束されてしまいます。彼がイスラエル当局の捕虜となったことで、リッダ闘争は完結せず、持続することとなりました。

次に、丸岡修さんは、作戦成功のニュースが流れた後、ヨーロッパ経由で帰国すべく、スイスに到着した頃、ヘラルド・トリビューン紙に彼の名がリッダ闘争の共犯者として掲載されているのを目にし、帰国を取り止めざる得なくなりました。

彼の名が、なぜこんなに早く公にされたのかについては、イスラエル当局に拘束された岡本さんが、強力な自白剤を投与されたからではとの説が語られていましたが、私は岡本さんが、パーシムたちの作戦実行部隊へのサポート要員として最終出撃地点であるローマまで同行していたのではないかと、それで出入国記録あるいはホテルの宿泊者名簿等から割り出されたのではと推測しています。PFLP のアブ・ハニの作戦では、常にそのような陣形を採っていました。日本赤軍の国際ゲリラ作戦も同様の形を踏襲していたのです。

イスラエル当局は、岡本公三さんに対する軍事法廷での裁判で大々的に報道することで、反テロキャンペーンを展開しました。

PFLP は、これに対抗するキャンペーンを強化すべく、重信さんに英文の政治声明を発するよう要請したのだそうです。そこで、重信さんは「ジャパニーズ・レッド・アーミー」名で声明を出しました。しかし、当時そのような組織実体は全くなく重信さん一人しかいなかったというのが実情でした。重信さんとしては、リッダ闘争後のアラブでの活動展開に向けた呼びかけを日本国内向けにしたかったのでしょう。国外に対しては「日本赤軍」、国内にむけては「アラブ赤軍」という使いわけをしていた時期もありました。

更に第三に、重信さんがリッダ闘争時に、既に妊娠していたことが、後日明らかになります。重信さんはパーシムの子と思っていたようですが、1973年3月1日に生まれた赤ちゃんは、日本を父とする容貌では無かったのです。誕生日から逆算すると、重信さんが妊娠したのは、まさにパーシムたちが決死作戦に向けてスタンバイしていた頃になります…。重信さんは、人の妊娠期間は「十月十日」だと思い込んでいたことから、パーシムの子と信じたと言っていましたが、むしろ作戦後、しばらくして重信さんの妊娠を知らされたPFLPの同志たちが、リッダ闘争の英雄の遺児が生まれる大喜びしたので、そう思い込むしかなかったのではないかと私は推測しています。

重信房子さんの出産で、新たな問題が生じた

重信さんは、日本出国時、旅券をスムーズに取れるように、その狙いからパーシムと婚姻届けを出し戸籍上、奥平房子名となっていました。アラブでの支配的な倫理、道徳基準となっているユダヤ教、キリスト教、イスラム教の戒律には「殺すな、盗むな、奪うな」等の他に、「汝の隣人を食ってはならない」(隣人の妻を寝取ってはならない)」というタブーがあります。PFLPの幹部がリッダ戦士の妻に子をませたということは、とんでもないスキャンダルになってしまいます。

PFLPの指導部は、重信さん母娘を急遽ベイルートから、イラクのバクダットを拠点としていたアブ・ハニの元へ送り、保護を託すことにしました。

これらの経緯が、リッダ闘争後の重信房子さんの活動方向を決定づけた。

そして又、彼女からの人員招請に応えた旧共産同赤軍派や全共闘系の旧知の人脈により、一本釣りのような形でリクルートされ、アラブに次々と結集した、私を含む日本人活動家たちの活動の在り方をも決定することになりました。アブ・ハニの指揮下で、彼の国際ゲリラ戦の一翼を担うことが、日本赤軍の出発点となったのです。

重信さんの出産については、PFLP の一部のメンバーたちだけの機密事項とされ、又重信さんの母娘が国際ゲリラ作戦を専門とする非公然のアブ・ハニ部局の庇護のもとに入ったことから、その存在とその後の活動は非公然の形を取る事になったわけです。

これらのことから、パーシムたちのリッダ闘争を無名の義勇兵による「一回性」の闘いとして決行

し、アラブでの活動に区切りをつけるという遺志は崩れてしまったのです。

檜森さんは、帰国後「リッダ闘争」共犯容疑で逮捕されたのですが、旅券法違反の罪に問われただけで済み、その後地下に潜るような形になっていました。丸岡さんが帰国を図り、箱崎ターミナルで逮捕された頃から救援活動に関わるようになりました。それ以降、南米で逮捕された西川純、ペイルートで一斉拘束された足立正生、戸平和夫、山本万理子さん、それに私と、国内に送還される人が立て続けになり、更には重信さんも 2000 年 11 月に高槻市内で逮捕され、「日本赤軍」の解散宣言が出されるに至りました。

檜森さんは、私の公判にも何度も傍聴に来たりして、救援活動を熱心に担っていたのです。

その一方で、旧知のごとく限られた仲間との飲み会では、酔うと「日本赤軍」に対する辛辣な批判を吐露することが多かったそうです。曰く、「日本赤軍はリッダ闘争の成果を篡奪したのだ！」等々。檜森さんは、2002 年 3 月 30 日に日比谷公園の一角「かもめの噴水」の近くで焼身自決を遂げました。

「リッダ闘争」後に、アラブに結集した私たちと重信房子さんは 1975 年の「在クアランプール・アメリカ領事館占拠作戦」(日本の獄中からの同志奪還闘争)後、組織として確立を目指し、司令部機関体制を発足させました。

その時点で、「日本赤軍」を組織名とすることを正式に決定したのです。ブント以来の「プロレタリア国際主義と組織された暴力」を掲げ「リッダ闘争の地平を継承し、堅持すべく、共同武装闘争による建軍、建党を進める」ことを、当面の活動の軸に据えました。パレスチナ解放闘争が展開していた武装闘争、それもアブ・ハニたちが押し進めていた国際ゲリラ路線に立脚していたわけで、日本国内の階級情勢等は踏まえられていませんでした。ただし、「リッダ闘争」以後「日本赤軍」は、イスラエルを直接の標的とした国際ゲリラ作戦は一度も行っていない。「リッダ闘争の地平」いずこ？

アラブの地で「日本赤軍」を名乗ることは、結果的に「リッダ闘争」を担った組織と自らを標榜することになります。

実際には、「リッダ闘争」直後、重信さんが当時全く実体のなかった「日本赤軍」名で英文の声明を発したこと、それ以来重信さんを中心とする日本人グループは、アラブでは「リッダ闘争」を担った組織ということで、通用することになっていたのです。「リッダ闘争の地平を堅持する」とかの決意を結集軸にしても、それはあくまでも決意表明でしかなく、「リッダ闘争主体」と自称してしまつたら、事実と反してしまいます。この点では、「日本赤軍」は、檜森さんからの批判を受けとめざるを得ません。2022 年「リッダ闘争」の 50 周年を迎えるにあたり、このことをしっかり踏まえておく必要があります。

「パレスチナ解放闘争の大義に、無名の国際義勇軍兵士として殉ずる」というのがパーシムたちの決意でした。

運動というのは行きつくところまで行きつかなければ収まらないのです。パーシム、サラハたちは全共闘運動の極北まで行き着いてしまったのです。しかも、一般旅行客をも巻き込んでしまう、空港ラウンジでの銃撃開始という、いわば「掟破り」の作戦を執行する以上、自らの死をもって一回性の闘争としてケリをつけ、完結させるという覚悟をしていたわけです。

国際ゲリラ作戦とかは、敵の弱いところへ意表をつく攻撃を仕掛けることで成立します。強大な敵に立ち向かう弱小勢力が「非対称の戦争」として採る事ことはあっても、運動として、あるいは組織としていつまでも継続すべきものではありません。ましてや、国家として「掟破り」をやり続けるイスラエルのような国家は、正当性を欠いています。

1973 年の中東戦争時、アラブの産油国による親イスラエル国に対する石油禁輸政策が世界中に衝撃を与え、パレスチナ革命勢力の国際的地位が高まったことから、PFLPは国際ゲリラ路線を取り止めにしました。

その結果、アブ・ハニの部局はPFLPから脱退し、独立軍団化して国際ゲリラ作戦を継続するようになりました。重信さんをリーダーとする在アラブの日本人グループは、アブ・ハニとの関係は維持しつつも、日本人組織としての自立を目指しはじめ、それに向けた「党のための闘い」を、活動資金と人集めを目的とする旅客機ハイジャックや大使館占拠作戦などの国際ゲリラ戦を主軸に展開し続けるようになってしまっていたのです。

たかだか、20 人～30 人ほどの常駐メンバーしかいなかった「日本赤軍」が、アラブの地で 30 年間も存在できたのは「リッダ闘争」を担った組織として自らをプレゼンテーションして来たことに負うところが大きかったことは否定できません。

「日本赤軍」の活動を有形無形に援助していたパレスチナ諸組織やアラブの軍人政権諸国は、1990 年にはいってソ連・東欧圏の崩壊により弱体化しました。

2011 年 5 月 29 日に、八王子医療刑務所で心臓病により胸をかきむしる苦しみの中で獄死した丸岡さんは生前「国際ゲリラ路線は誤りだった。レバノン南部前線でのパレスチナのコマンド部隊による対イスラエルの軍事活動や、難民キャンプでのボランティア活動などを担うべきであった」との捉え返しを彼向けの救援パンフ『夢と希望の通信』に書き残していました。

「日本赤軍」は、1990 年代始めから、南米、東欧、アジア、そして日本国内へと散開する中でメンバーが次々と逮捕され、国内に送還されました。

2000 年 11 月には、重信さんが高槻市で逮捕されたことから、国内のメンバーや支援者らが一斉ガサ入れ等の弾圧を回避するために解散宣言を出して欲しいと重信さんに要請し、重信さんがそれに応じたことで「日本赤軍」は組織として消滅しました。

1971 年 2 月にパーシムと重信さんがアラブに赴いて以来、30 年間続いていた「日本赤軍」の歴史の幕を閉じたのです。

「日本赤軍」がかくもあっさり解散宣言を出した背景には、当時既に「日本赤軍」の国内組織として「人民革命党」が結成されていたということがありました。

当然ながら非公然の秘密組織の形を採っていました。そのような在り方は「日本赤軍」同様、機密と権力が指導部に集中し、陰謀政治が進められることとなります。人民革命党による社民党への介入戦術の展開は、参議院選挙神奈川地区へ人民革命党の国内代表が社民党から立候補する寸前にまで行っていました。この件は、重信さんが逮捕されたことで、人民革命党関係の人脈がかなりの程度公安警察によって割り出されたことで頓挫しました。社民攪乱党・・・。

重信さん逮捕時、アジトにしていた西成のワンルーム・マンションから多数の内部文書が押収され、組織機密が公安筋に捕まれてしまっています。その一部は、私の裁判でも検察側から証拠文書として開示されました。

重信房子さんは、リッダ闘争後の時点から、組織建設は「非公然から公然へ」と進めなければならぬと、お題目のように言い続けて来ました。

これは自身がアブ・ハニのもとで国際ゲリラ路線を採るようになったことに、合わせてた主張ではないのですが、人民革命党もそれに倣ってしまっていたわけです。広範な公然運動、その部門なくして非公然部隊とその活動とが存立しうるはずはありません。アブ・ハニの国際ゲリラ路線も、数百万人に及ぶパレスチナ難民たちの多様で広範な日常活動や、公然の武装部隊の軍事活動が基盤にあってこそ成立していたのです。

重信さんが逮捕され、公然化したことにより、アラブで育ったお子さんの帰国と日本国籍取得とが実現しました。重信さんの子育てが成就し「日本赤軍」という擬似家族共同体は解散、解消に至ったわけです。この点ではみごとなハードランディングだったと言えるかも知れません。「一将子育て成って、一軍枯れる」

ただし、岡本公三さんがレバノン政府に「リッダ闘争の英雄」として政治亡命を認められ、今もベイルートに滞在していること、他にも6名の旧メンバーが国際指名手配された状態にありこと、更に3名が府中、熊本、徳島刑務所に服役中である等が継続案件として残っています。

重信房子さんの満期出所(2022年5月28日)と「リッダ闘争50周年」と重なることにより、様々なイベントや集会在催されることでしょう。

この数年「10.8羽田闘争」や「全共闘運動」の50周年ということで、やはり集会、イベント、出版活動などが行われて来ましたが、それらは旧「新左翼」の運動が現在ではすっかり衰退してしまったことの裏返しとしての盛況であるといえます。なぜ、旧「新左翼」の政治闘争や社会運動が低迷、後退してしまっているのか、50周年を機に「原子カムラ」ならぬ「新左翼ムラ」「赤軍ムラ」の壁を突き破る総括実践が真正面に進められることを、私は獄中で強く願っています。タスキを次世代へ。私自身も「終活」として果たしていきます。